

解脱と輪廻

菅原伸郎

南無
善財

三月二十日で、オウム真理教による地下鉄サリン事件から満十年を迎えた。なぜ、あんなことが起きたのだろう。無期懲役が確定している林郁夫受刑者の『オウムと私』（文庫）を改めて読んでみた。事件当時は四十八歳。分別盛りだった元医師が、逮捕されて三年目に出版した手記である。

医学部の時代からヨーガに関心があり、阿含宗を経て麻原彰晃に弟子入りした。異様に感じるのは、青年期から「解脱」へ強い関心を持っていたことだ。「最終解脱」を求めてグルに近づき、自分の大便を食べる

「修行」までしている。その宗教観は分からない点も多いが、幼児体験なども含めて、背景には満たされな何かがあったのだろう。

死後の靈魂や輪廻転生のこともしきりに書いている。その後の「ポア」などの殺人行為も、被害者に死後の世界があることで自分を納得させていたようだ。優秀な心臓外科医が、なぜこうも闇におびえたのだろうか。昭和天皇や靖国神社が大好きで、病院の同僚からは「政治オンチ」と陰口を言われたほど、世間離

れもしていたらしい。

この手記を読みながら、日本では釈尊の教えがどこまで正しく伝わっているのか、と思わざるをえなかった。たとえば、解脱は本来、日常を離れた別世界にあるのではない。道元禪師が中国の寧波に着いたとき、食材を買いに来た禅寺の老料理番に「あなたはまだ、弁道修行が分かっていない」と笑われた故事を思い出せば、真理が遠くない眼前にあることは明らかである。

そして、日本仏教が容認してきた靈魂観の問題がある。古代からの先祖崇拜や呪術に、伝統寺院が迎合し、一部の新興教団はいまも怖れを煽っている。盂蘭盆会や彼岸会などで、来世や靈魂が実体として存在す

るかのようにも話してきた。浄土真宗を除く多くの寺では、精霊を前提にした施餓鬼や加持祈祷を風習として続けている。しかし、釈尊は来世や靈魂の存在を認めたらうか。呪術や先祖供養をしただらうか。

もちろん、そんなことはない。いくら考えても分からないことに執着するべきでない、と説かれたのだ。

この「無記」を知らない僧侶はいないはずだが、あまり積極的に語ってはいない。根強い神道的靈魂観を無視できない面もあるだろうが、収入源としての先祖供養や施餓鬼を重宝しているからではないか。事情は分かるとしても、そろそろ、こうした逸脱からは抜け出すべきである。

仏教の本を読んでも、なぜか輪

廻転生についてはあいまいな記述が多い。難しい論議はあるにしても、私は秋月龍珉老師の「靈魂を認めない。あの世も信じない。輪廻転生も否定する」という明快な言葉を大切にしていきたい。晩年にお教えただった浄土思想家・石田瑞麿先生も「葬式も墓も無用」という姿勢を死後までも貫かれた。

この十年、ほかにも怪しい教団やペテン師がいろいろ話題になった。民放テレビ局では、占い番組や心靈

特集が大流行だ。それもこれも、正しい教えを伝えてこなかったことに一因がある。心ある出家者には、通夜や法事の席で、ただ儀式をするだけでなく、本当の釈尊の教えを少しでも説いてほしいものである。

いや、彼らには多くを期待できないかも知れない。それなら、在家の私たちこそが、何が本当の教えか、自分自身で学ばねばならない。信頼できる先生を探し、原典に挑戦し、手探りしていかなければならない。それが本当の仏教を再興する道ではないか……。

などと、気張ってはみたが、これも楽な道ではないのです。今夜もまた、わがご住職と酒を飲みますか。

(すがわら・のおお/ジャーナリスト)

